

「激動の90年、歴史を動かした90人」より

三宅 一生

—日本でものづくりをしたい

生駒芳子(ファッションジャーナリスト)

「一枚の布」など、独創的な発想のデザインが世界的に評価されているファッションデザイナー・三宅一生(74)。ジョブズも愛したその訳とは。

もし歴史に、三宅一生という存在がなかったら、世界はどう変わっていただろうか？ まず、世界中の活躍する女性たちが、アイデンティティを表現するために着る服を探せずにいただろう。スティーブ・ジョブズは、新製品発表の場で、黒のタートルネックによるミニマルなスタイルを確立できずにいただろう。さらには、この21世紀、日本のものづくりも、デザインの世界も、未来への道筋を探せずにいただろう。

三宅一生は7歳の時に、広島で被曝という体験を経て、デザインの道を選んだ。高校時代に、通学路にイサム・ノグチがデザインした橋「つくる」「ゆく」があったことが、デザインに対するインスピレーションに繋がったという。大学時代には、早くも才能が認められ、広告やファッションでの活躍が始まる。卒業の時点で発表した「布と石の詩」は、衣服の根源、存在理由を問うという三宅一生が一貫してもち続ける哲学を、すでに完璧な形を指し示していた。

パリのオートクチュールメゾンで経験を積んでいた1968年、五月革命に遭遇する。アトリエの窓から、警察に抵抗して路上を駆け抜ける学生たちの姿を見て、「ここにはいけない。より多くの人のための服づくりをしなくては」という直感を受ける。

1970年、三宅デザイン事務所を東京に開設。パリでもニューヨークでもなく、東京に拠点を置いた理由を、三宅一生はこう振り返る。「日本に何度も帰ってきていて、感じたのです。日本でものづくりをしたいと。この国のものづくりのエネルギーを強く感じたので、迷いはありませんでした」

70年代以降のパリコレクションでの三宅一生の活躍は、欧米のファッション界に衝撃を与え続けた。三宅一生は“洋服”から“洋”の字をとり、東洋・西洋の枠を超えた普遍的な“衣服”の概念を打ち立てた。「着ることとは、何なのか？」「服の存在意義とは？」という視線は、欧米のファッションにも刺激を与えた。87年から99年にかけてのコレクションを、写真家アーヴィング・ペンが撮影し続けたことも大きな意味をもつ。

布の存在感をいかす「一枚の布」という発想。古代ギリシャの衣装からサリーや着物までを連想させる着想だが、布とからだのあいだに生じる空気感やフォルムに宿る美しさや機能性がそこに表現された。人間が人間らしくいるために、ボディを解放し身体感覚をとりもどす「BODYWORKS」という発想。プラスチックや籐でボディを象ったシリーズは、アートの世界でも高い評価を得た。「生活着」を真摯に考えるという視線は、アクティブに生きる現代人に広くエ

エネルギーを与えた。社会進出する女性たちを応援する、自由と楽しさと美しさを備えた「プリーツ」等の開発。これらの活動は、もはや「発明」と呼ばれている。

もとより三宅一生は、自らの表現を「ファッション」ではなく「デザイン」であると言明する。一過性の流行ではなく、研究開発としてのものづくり、という視線だ。彼の元から次々と若い才能が飛立つ様子は、まるで20世紀初頭の美術学校バウハウスのようだ。

「21世紀、デザインに関わる人間は、社会のことを考えて判断し、行動しなければならない。産地と継続的に仕事をする、日本でものを作るということを、もっと大切に考えて欲しい」三宅一生は、そう語る。繊維一本から開発し、伝統のものづくりから最新のテクノロジーまで見渡す素材開発の視線も、活動当初から現在に至るまで一貫している。ちなみに2010年にスタートしたブランド「132 5. ISSEY MIYAKE」は、愛媛県で糸を作り、織るのは福井県、染めるのは石川県、宮城県でプレスし、大阪で箔押しをするというオール・ジャパンなものづくりを実現している。

日本のものづくりが、未来への道筋を模索するいま、いちばんの牽引力は「デザインの力」である。三宅一生の活動が、そのことを証明し、教えてくれる。

「文藝春秋」2013年新年特別号 P284～ 抜粋。